Human Rights

令和７年度

第44回　全国中学生
人権作文コンテスト

横浜市大会
作文集

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会
横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

横浜市教育委員会

第44回
全国中学生人権作文コンテスト
横浜市大会作文集

はしがき

昭和二十三年（一九四八年）十二月十日に国際連合総会で世界人権宣言が採択されたことを記念して、毎年十二月四日から十日まで人権週間が設けられています。

これにあわせて、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会と横浜市教育委員会の共催で「全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会」を実施しています。

本コンテストは、次代を担う中学生が人権問題についての作文を書くことを通じて人権尊重の重要性や必要性についての理解を深め、豊かな人権感覚を身につけることを目的としています。

本年度は、一二一校、五三、四五九編に及ぶ多数の作品が寄せられました。

コンテストに寄せられた応募作品は、いずれも中学生らしいみずみずしい感性に富み、人権問題について自ら真剣に考えて意見を述べたものばかりで、応募された皆様の真摯な姿勢には心を打たれるもの

があります。

この作文集は、校内審査を経た二九三編から、一次審査で五三編、二次審査で二十五編を選考し、さらに最終審査で最優秀賞、優秀賞に選ばれた作品の中から二〇編を収録したものです。より多くの方々にお読みいただき、身近な生活の中で人権尊重の輪が広がることを願ってやみません。

終わりに、コンテストの実施にあたり多大な御尽力をいただきました、審査に関わられた先生及び多くの関係者の皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

令和七年（二〇二五年）十二月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会
（横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局）
横浜市教育委員会

主催者代表挨拶

第四四回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会に、市内一二一校から五三、四五九編の作品を御応募いただき、中学生の皆さんありがとうございました。日頃の自らの体験を通じて感じたことや考えたことを人権の視点から見つめ直し、一つの作品としてまとめ上げた皆さんの意欲と努力に心から敬意を表します。

参加された各校の先生方におかれましては、熱心に御指導いただき、また審査にあたられましたことに厚く御礼申し上げます。

応募作品のテーマは、高齢者や障害児・者、外国人、性の多様性など、幅広い分野にわたりました。作品の多くは、家族や友人、地域の人との日常のふれあいやニュースを通じての、ふとした気づきや心の動きを素直に表現しており、その感覚の鋭さに、はっとさせられる作品が数多くありました。中でも、自分自身の経験を踏まえた「対話」の重要性に言及した作文、ひとり一人の個性を大切にすることを訴えた作文は、特に心に残りました。

中学生の皆さんが、人権作文を書くことで培った「人権の視点」を、これからも永く持ち続けてくだ

さることを心から願っております。

横浜市大会においては、校内審査を経た作品について、横浜市立中学校教育研究会国語科部会の先生方による一次審査、教育委員会事務局指導主事による二次審査を行い、最終審査で最優秀賞など各賞を決定いたしました。最優秀賞のうち、「対話のない世界で、」、「「普通」を「個性」に」、「私のこと」、「祖母を通して知った事」、「小さな「嫌だ。」がつなぐ大きな権利」、「広島の石碑の前で誓ったこと」、「ジョークと差別の境界」、「笑顔のバトンをつないでいく」を神奈川県大会の優秀賞として推薦しましたことを御報告いたします。

審査員の皆様におかれましては、御多忙中にもかかわらず、多大な御協力をいただきましたことに改めて御礼申し上げます。

最後に、この作文集が、中学生のみならず、広く市民の皆様が人権について考えるきっかけとなれば幸いです。

審査員長　髙　橋　　潤

（横浜市人権擁護委員会　会長）

目次

はしがき
主催者代表挨拶
入選者紹介……1

最優秀賞

※一部、未掲載の作文があります。

●横浜市長賞
対話のない世界で、　横浜市立希望が丘中学校……三年　鄭（てい）　愛理（あいり）……7

●横浜市教育長賞
「普通」を「個性」に　横浜市立岩井原中学校……一年　岡野（おかの）　仁美（ひとみ）……10

●横浜人権擁護委員協議会長賞
祖母を通して知った事　横浜市立鶴ケ峯中学校……二年　中村（なかむら）　伍希（いつき）……13
「私のこと」　……匿名

●横浜市人権擁護委員会長賞
「広島の石碑の前で誓ったこと」　横浜市立本郷中学校……三年　佐伯（さえき）すみれ……16
小さな「嫌だ。」がつなぐ大きな権利　横浜市立軽井沢中学校……一年　前田（まえだ）　凪（なぎ）……18

●横浜ＦＣ賞
ジョークと差別の境界　横浜市立もえぎ野中学校……　三年　光田（みつだ）　小春（こはる）　…21

●ニッパツ横浜ＦＣシーガルズ賞
笑顔のバトンをつないでいく　横浜市立南高等学校附属中学校…　一年　塚本（つかもと）　紗代（さよ）　…24

●横浜ビー・コルセアーズ賞
理解で越えられる壁　横浜市立汐見台中学校……　三年　寺岡（てらおか）　大輝（だいき）　…26

●横浜キヤノンイーグルス賞
弟の言葉　横浜市立新田中学校……　三年　広松（ひろまつ）　悠斗（ゆうと）　…29

●横浜ＤｅＮＡベイスターズ賞
気付くことから始まる、一人ひとりの人権　横浜市立南瀬谷中学校……　二年　重本（しげもと）　龍士（りゅうじ）　…31

●横浜Ｆ・マリノス賞
かわいそうではない。　横浜市立中和田中学校……　二年　山田（やまだ）　歩夢（あゆむ）　…33

優秀賞

同じ人間で同じ地球に住んでいる　横浜市立横浜吉田中学校……一年　小尾レイナ……35
違いの受け入れ合い　横浜市立仲尾台中学校……一年　境澪……37
一人を見つめて　横浜市立早渕中学校……二年　髙平真帆……39
「正しい疑い」　横浜市立荏田南中学校……三年　土肥篤史……41
誰かのための勇気　横浜市立岡野中学校……一年　永井優里奈……44
「好きな色を選ぶことができる社会へ」　横浜市立豊田中学校……三年　中尾明日香……46
おばあちゃんの心をみつめて　横浜市立大道中学校……三年　米山真未……48
車いすのおばあちゃんと見た景色　横浜市立矢向中学校……三年　渡部桜咲……51
祖父から受け継いだ強さ……匿名……53

参加校紹介……56

応募状況……58

入選者紹介（敬称略）

最優秀賞（横浜市長賞）

鄭（てい）　愛理（あいり）　対話のない世界で、……横浜市立希望が丘中学校　三年

最優秀賞（横浜市教育長賞）

岡野（おかの）　仁美（ひとみ）　「普通」を「個性」に……横浜市立岩井原中学校　一年

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

中村（なかむら）　伍希（いつき）　祖母を通して知った事……横浜市立鶴ケ峯中学校　二年

匿　名　「私のこと」……（非　公　表）

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）（氏名五十音順）

佐伯（さえき）すみれ　「広島の石碑の前で誓ったこと」……　横浜市立本郷中学校　三年

前田（まえだ）　凪（なぎ）　小さな「嫌だ。」がつなぐ大きな権利……　横浜市立軽井沢中学校　一年

最優秀賞（横浜ＦＣ賞）

光田（みつだ）　小春（こはる）　ジョークと差別の境界……　横浜市立もえぎ野中学校　三年

最優秀賞（ニッパツ横浜ＦＣシーガルズ賞）

塚本（つかもと）　紗代（さよ）　笑顔のバトンをつないでいく……　横浜市立南高等学校附属中学校　一年

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

寺岡（てらおか）　大輝（だいき）　理解で越えられる壁……　横浜市立汐見台中学校　三年

最優秀賞（横浜キヤノンイーグルス賞）

広松（ひろまつ）　悠斗（ゆうと）　弟の言葉 ……横浜市立新田中学校　三年

最優秀賞（横浜ＤｅＮＡベイスターズ賞）

重本（しげもと）　龍士（りゅうじ）　気付くことから始まる、一人ひとりの人権…横浜市立南瀬谷中学校　二年

最優秀賞（横浜Ｆ・マリノス賞）

山田（やまだ）　歩夢（あゆむ）　かわいそうではない。……横浜市立中和田中学校　二年

優秀賞（氏名五十音順）

小尾（おび）レイナ　同じ人間で同じ地球に住んでいる ……横浜市立横浜吉田中学校　一年

境（さかい）　澪（みお）　違いの受け入れ合い ……横浜市立仲尾台中学校　一年

髙平（たかひら）　真帆（まほ）　一人を見つめて ……横浜市立早渕中学校　二年

匿名			
土肥　篤史	「正しい疑い」	横浜市立荏田南中学校	三年
永井優里奈	誰かのための勇気	横浜市立岡野中学校	一年
中尾明日香	「好きな色を選ぶことができる社会へ」	横浜市立豊田中学校	三年
米山　真未	おばあちゃんの心をみつめて	横浜市立大道中学校	三年
渡部　桜咲	車いすのおばあちゃんと見た景色	横浜市立矢向中学校	三年
	祖父から受け継いだ強さ	（非公表）	

入賞（氏名五十音順）

荒木　麻里	対立より個人の尊重を	横浜市立鶴見中学校	三年
石河　莉瑚	小さな助けてに寄り添って	横浜市立樽町中学校	三年
内田　紗英	障害は人にあるのではなく社会にある	横浜市立本宿中学校	三年
遠藤　綾	価値観の違い	横浜市立東鴨居中学校	一年
大垣葉奈加	「好き」を認め合えるように	横浜市立名瀬中学校	三年

小川　依真　暴言が飛びかう世界で……横浜市立すすき野中学校　二年
小川瑚心奈　二度目の期待……横浜市立戸塚中学校　二年
何　美琪　勇気の第一歩、みんな大進歩……横浜市立森中学校　三年
亀島　千早　知ってほしい、この気質のこと……横浜市立大正中学校　三年
木村彩果音　世の中には「分からない」が多すぎる……横浜市立寺尾中学校　三年
木村　唯花　自分にできる小さな一歩……横浜市立松本中学校　三年
櫛田　茜　見方を変える……横浜市立日限山中学校　一年
小木曽拓人　一粒のチョコレート……横浜市立茅ケ崎中学校　二年
小林　夏凛　やり返すではなく思いやりを……横浜市立菅田中学校　二年
小林　迅　数字は人を判断できるのか……私立横濱中華學院中学部　二年
鈴木　彩未　差別のない世界にするために。……横浜市立山内中学校　三年
塚原　あや　一つの言葉……横浜市立日吉台中学校　三年
土井　結仁　改めるべき間違った認識……横浜市立舞岡中学校　二年

富田小々音（とみたここね）　もう一度向き合って……　横浜市立瀬谷中学校　三年

錦織（にしきおり）　千穂（ちほ）　人生を彩る、教育で……　横浜市立栗田谷中学校　三年

秦（はた）　優衣佳（ゆいか）　いばらの道でも・・・……　横浜市立新田中学校　一年

宮本（みやもと）　清夏（さやか）　優しい社会へ……　横浜市立あざみ野中学校　三年

山田（やまだ）　波音（はのん）　たった一つの命を大切に……　横浜市立富岡東中学校　二年

吉田（よしだ）　遥（はるか）　「当たり前」とは……　横浜市立南高等学校附属中学校　三年

米久保（よねくぼ）　玲妃（れい）　マスクを外すという選択……　横浜市立日吉台中学校　三年

匿　名　ルッキズムと向き合う……　横浜市立新井中学校　三年

匿　名　人間だからこそ使える言葉を大切に……　（非公表）

匿　名　境界をさまよう私達……　（非公表）

最優秀賞（横浜市長賞）

対話のない世界で、

横浜市立希望が丘中学校　三年
鄭（てい）　愛理（あいり）

インターネットの海に飛び込むと、今日もまた、何かが炎上している。「その言い方は配慮がない。」「これは差別だ。」「傷ついた人がいるのだから、あなたが悪い。」このような、人権や多様性を大切にしようとして何かを批判する投稿が、いまや日常的に見られるようになった。これは人々の人権への意識の高まりの現れであろう。しかし、私は時々、その正しさに恐怖を覚えるのだ。

数年前、あるニュースを目にした。ある企業が商品のＰＲのためにＳＮＳに漫画を掲載したのだが、それが物議を醸したのだ。漫画の内容は、父が昼ごはんを作り子どもと食べるというほのぼのとしたものだった。この広告は一見問題ないように見えたが、帰宅後の妻が夫と一緒に片付けをするシーンを読んだ一部の読者から、女性に家事を強要していると捉えられたのだという。

もっと身近な例をあげよう。最近こんな場面をよく目にする。ユーチューバーがゲームをする時、キャラクターの肌の色についてイジリそうになり、慌てて発言を取り消していた。さらに、性の多様性をテーマにした小説を読んでみても、作者の後書きは注釈と括弧の補足説明だらけ。みんな「炎上」を回避するために必死なのである。

こんな場面に出会うたび私は、「生きづらい世の中だ。」と思うのだ。

今人々が必死になってやっている批判は、ハリボテの正義なのではないか。どれほどの当事者が、どんな痛みを抱えているのか、何が問題なのかにすら目を向けず、誰かが勝手に作ったＮＧ言動集だけが一人歩きをしている。

インターネットが普及した現在、多くの人が、自身の言葉をいつでも発信できるようになった。しかし同時に、その言葉や事象の裏にどんな意図があるのかも知らず、「悪い人だ」と判断する人があまりにも多い。はじめにあげた企業の事例は企業全体への批判である。しかしそのたくさんの批判が一人の人間へ向けられた時、その人の人権は考慮されるのだろうか。ＳＮＳでは同じ意見や価値観を持つ人々が集団を形成し、一部の人たちの偏った意見が強く拡散される。最終的に、それは世間の意見かのように語られてしまう。だとするならば、その意見を武器に発信者を攻撃することは、本当に人権を大切にしているといえるのだろうか。そして、そこに対話の余地はあるのだろうか。

私は小学校の低学年の時、こんな体験をした。ある日、女の子のＡさんが髪をショートカットにして学校に登校した。スポーツクラブに入るので切ったと教えてくれた。Ａさんの友達が可愛いと褒めるなか、一人の男の子が、「男子みたい」と呟いた。それを聞いたＡさんは、ショックで泣きだしてしまったのだ。その瞬間、その場にいた全員が一斉に男の子を責めた。結局その場は騒ぎを聞きつけた先生によって収められた。

私はあの時のことを後悔している。あの後私がＡさんに話を聞くと、元々背が高いのがコンプレックスで、自分が気にしていたことを言われて悲しくなってしまったとのことだった。Ａさんは間違いなく被害者で、守られるべきだ。しかし、私は男の子のＢさんのことを全く考えていなかった。彼がなぜそんな発言をしたの

か、どんな想いがあったのか、想像すらしなかった。Bさんに話を聞いてみようという発想に至らなかった。今思うとかわいそうなことをしたと思う。彼はまだ幼かったのに、大勢で、言葉で彼を攻撃してしまったのだ。

今の私たちに圧倒的に足りず、最も重要なものは何か。私は「対話」だと考える。独白でも、議論でも、討論でもない、「対話」である。

ここでの「対話」とは、言葉を通じて互いの想いを受け止め合うことだ。具体的には、ＳＮＳでの投稿などに対し、偏った意見をぶつけるのではなく、相手の言葉の意図を想像し、確かめ、納得するということだ。自分の想像と相手の意図が違うのならば、言葉を交わして調節すればいい。

人権という議題はあまりに抽象的で、複雑で、センシティブだ。にもかかわらず、今では多くの人が人権を議題に挙げて、ＳＮＳで鋭い言葉を投げ続けている。一人の言葉に大きな力はなくとも、それがたくさん集まれば、言葉は凶器になり得る。

私は言葉で一人の人間を攻撃してしまった。彼はどんな気持ちだっただろう。あの時彼と対話しなかった私に、こう言ってやりたい。正しさは、対話をやめた瞬間、暴力に変わる。対話をしよう。複雑な世界の中で、やさしい正義を育てるために。誰かを黙らせない、生きやすい世界を築いていくために。

最優秀賞（横浜市教育長賞）

「普通」を「個性」に

横浜市立岩井原中学校　一年
岡野仁美（おかのひとみ）

「なんでスカートはかないの？」

小学生のころ、友達から急に質問された。あまりにも突然だったから、すぐには答えられなかった。少し考えてから私は友達に、「動きやすいからかな」と思ってもいないことを答えた。私がスカートをはかずにズボンをはく本当の理由は「かっこいい」し「男の子っぽい」からだ。しかし、本当のことを話したら周りの人が離れていったり、変な目で見られると思い、家族にも友達にも話したことはない。

小学校の卒業式、私はパンツスーツを着ることにした。周りは袴やスカートのスーツの人が多かった。パンツスーツを買ってもらうときにも、母からは「かなり男の子に見えるけどいいの？」と言われた。どうして男の子に見えてはいけないのだろう。どうして周りに合わせて女の子らしく生きないといけないのだろう。自分の好きな服を着るのは一般的に見たら普通ではないのだろうか。私は私らしくいたいだけなのに。そんな疑問が頭の中に溢れた。

卒業式当日、私は堂々とパンツスーツを着ていった。長い髪も上にまとめた。周りの子が「かっこいいね」「似合ってるよ」と言ってくれたことに、少し驚いた。今まではそんなふうに言ってくれる人が周りにいな

かった。自分を認めてもらえたような気がして、とても嬉しかった。さらにカメラマンの人に、男の子だと思われた。でも不思議と嫌な気持ちにはならなかった。

中学校の制服を買うとき、私はスカートではなくズボンにしようか迷った。しかし周りの友達は口を揃えて「スカート」と言った。ある友達は「ズボンだったら浮くかもしれないじゃん」と言った。確かに新しい環境になって浮いてしまうのはとても怖い。私は「自分らしさ」を潰し、周りに合わせてスカートを買った。

私は周りに合わせるために「自分」を潰して、その仮面をつけた「自分」と関わってくれる友達を失うことが怖い。それ以上に周りから「普通じゃない」と、変な目で見られるほうが怖い。なぜ自分とは違うからと変な目を向けてくるのだろうか。私は、周りが思う「普通」と私が思う「普通」が違うことを自覚している。しかし、「普通」とは何なのだろうか。多くの人が感じたり、思ったりすることを「普通」というのだろう。私は普通という言葉は人の数だけあっていいと思う。世の中に自分と全く同じことを思っている人はいないし、同じ心を持つ人もいない。多くの人が思う普通も深く考えれば違う部分もあるのではないか。なら、人それぞれの「普通」をその人の「個性」として受け入れることが重要なのだと思う。

今、世界には「ジェンダー平等」や「トランスジェンダー」という言葉がある。ジェンダー平等の意味は性別関係なく、差別や偏見をなくし、すべての人が尊重され安心して生活できる社会という意味だ。この言葉は世間に広まってはいるが、未だに人の中には「男の子は青、女の子はピンク」や「男の子はズボン、女の子はスカート」という考えを持っている人がいる。トランスジェンダーの意味は生物学的性と性自認が異なる状態を指す。人間は生まれたときから性別が選べるわけではない。女として生まれても男として生きたい人もいる。反対に、男として生まれても女として生きたい人もいるのだ。生物学的な性と心の性が一致しない人を差

別したり、変な目を向ける必要はないと思う。

人権とは、すべての人が生まれながらにして持つ、自分らしく生きる権利のことだ。

人は性別にとらわれず、自分らしく生きる権利を持っている。自分の着たい服を着て、自分の好きなように生きることができるのだ。

一人一人の思う「普通」を「個性」として受け入れることが、誰もが暮らしやすい平和な世界への第一歩なのではないか。だから私はこれからも自分が思う「普通」を大切にしていきたい。

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

祖母を通して知った事

横浜市立鶴ケ峯中学校　二年
中村伍希（なかむらいつき）

この作文に取り組んで僕は真っ先に自分が幸せと感じる時は、どんな時だろう?と考えました。お寿司を食べれる時、バラエティ番組を見て笑っている時、部活で自己ベストが出た時…。どれも日常の何気ない時間です。その後、祖母に会ったので同じ質問をしてみました。

「いつき君とけいと君（僕の弟）に会える時」と言ってくれて、すごく嬉しく温かい気持ちになりました。

祖母は、アルツハイマー型認知症です。僕が祖母の病名を知ったのは、突然、祖父が亡くなった六年前です。

母は朝と夜に毎日、祖母に電話をします。夜の電話は、僕と弟のどちらかが「お薬を出してきて。水を用意して。お薬飲んで。」と祖母にお願いし、飲めたことを必ず確認してからバイバイすることが日課でした。

僕たちと電話で話すと喜んでくれ「いくつになった?」から始まり、昨日も話をしたはずなのに、「元気やった?」とすごい久しぶりのように話してくれて、薬を服用してもらうまでに時間がかかることも多かったです。見たいテレビ番組があるのになって思ったり、読みかけのマンガが気になったりして、いつも電話口で「ばぁば早く早く」と思っていました。

そして、いつからか僕と弟は、どっちが電話をするか毎晩なすり付け合うようになりました。見兼ねた母が「もう頼まへん。」と怒って、その日から僕たちが祖母と電話で話すことはなくなりました。母には悪いけれど、解放された気持ちいっぱいで、僕の背中には透明の羽が生えていました。

そんな祖母と僕の関係が変わったのは、昨年の六月でした。祖母がクーラーの電源を入れることが出来ず、熱中症を起こして、入院したことがきっかけでした。何日も薬が飲めていなく、家も荒んでいたそうです。

お見舞いに行った時、痩せてしまった祖母を見て心が苦しくなりました。母ではなく僕が「薬を飲んで。」とお願いしていたら、今もきちんと飲めていたかもしれない。「クーラーを入れて。」と僕が、お願いしていれば入院していなかったかもしれない。そんなたられば言葉が僕の頭の中をぐるぐる回って、顔を上げることが出来ませんでした。

今、祖母は横浜の介護施設にいます。僕たちが会いに行くと、笑顔で迎えてくれます。そして「いくつになった？」「えっ‼中学生⁉」「なにかしとるの？」「えっ‼陸上部⁉」「足早いんやね？」僕は答えます。

「足遅いけど、頑張ってるよ。」

一緒にいると何度も、まるでネタ合わせの練習みたいに、僕とこの会話をします。そしてその度、初めて聞いたかのように祖母は僕の成長を喜んでくれます。

高齢者になれば食事、行動、会話、全てにおいてゆっくりした時間が流れます。「幸せだ。」と感じる事も中学生の僕のように次々出てくるわけではありません。だから、その幸せと思ってもらえる時間を僕たち若者も一緒に、大切にしていくことで、さらに高齢者の笑顔が増えるのだと知りました。

週末、家族で祖母と会える時間は、一緒にしりとりやトランプ、すごろくをしています。その間、僕は「い

くつになった?」から始まるネタ合わせの練習を祖母と何度もし、みんなで笑います。

僕が生まれてから、ひとつだけ変わらなかった祖母の優しい目を見ながら過ごす、このゆっくりした時間を僕は大切にしていきたいです。

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

「広島の石碑の前で誓ったこと」

横浜市立本郷中学校　三年
佐伯（さえき）　すみれ

人権と聞いて、最初に思いついたことは、祖父母の家がある広島のことだ。今回の夏休みにも原爆ドームと平和記念資料館へ行ってきた。私にとって原爆は、教科書の話のひとつではなく、家族の歴史の中に根付いている、とても身近な出来事だ。

私の広島の親戚はとても少ない。それは８０年前の原爆で、曾祖父母の兄弟のほとんどが亡くなったからだ。長期休みに帰省すると、決まって曾祖父母は原爆の話をした。最初は聞いていて怖くなるし、気持ちが悪いので嫌だと感じていた。しかし今では、生きていた時に直接聞くことができて、よかったと感じている。教科書の文章だけでは伝えきれないような、大きな思いがあると思う。戦争の話をする時、曾祖父母はいつも辛そうに、しかしとても強い口調で話した。悲しみと苦しみの中に長く居続けてきたことが、私にも伝わった。夕食時の恒例となっているその時間は家族全員できちんと話を聞くと、暗黙の了解で決まっていた。これが広島の家庭なのかもしれない。

「自分以外の兄弟を一瞬で失うことになった」という事実について、私は気づいたことがある。それは、その時代を生きていた人だけではなく、その人たちが生きていたら生まれ、長い人生を歩むはずだった多くの子

孫たちの人生も同時に奪ったのだ。親戚がいないことで、そのことを強く感じた。曾祖母は亡くなった7歳下の妹のことをとてもかわいがっていたそうで、どれだけ時間が経っても寂しくて仕方がないとよく言っていた。もし生きていればお互いの子どもたちを楽しく遊ばせる未来も、あったかもしれない。しかしそれは叶わなかった。曾祖母はたった一人で大人になり、母親になり、祖母、曾祖母となって生きた。

私は人の命を奪うことは、何があっても許されないと思う。絶対にあってはならないことだ。母が私を産む時に、出産とは、小さなかわいい赤ちゃんひとりを産むことだけではなく、その子の人生そのもの、そしてその子から続いていく命のバトンを産み出すことなのだと、体感として理解したと話してくれた。命はつながっていく。母も曾祖母も、話の内容は真逆だが、中身は同じことだ。

戦争の悲惨さを知った私に今できることを考えたが、わからなかった。政治の話も、核の話も考え続けてみたが、難しい。ただ、戦争は悲しいことで、今現在も起こっているという事実だけが重くのしかかる。答えがわからなくても、考え続け、その時その時に思いついた考えを行動に起こしていこうと思う。今はただ、戦争の体験を実際に聞いたひ孫として、その時に感じた思いを忘れずにいること、そして発信する機会を探し続けたいと思う。今年の夏も曾祖母の兄弟が眠る石碑の前で、誓った。

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

小さな「嫌だ。」がつなぐ大きな権利

横浜市立軽井沢中学校　一年
前田（まえだ）　凪（なぎ）

「嫌だ。」という小さな気持ちが僕に人権の大切さを教えてくれたのは、小学五年生のときでした。

予防接種で注射の針を見た瞬間、心臓がドクドクして息が詰まりそうでした。母は「大丈夫だから。」と背中を押してくれましたが、僕の頭の中は「どうして怖いことを無理にされなければならないのか。」という思いでいっぱいでした。

そんなとき、お医者者さんが落ち着いた声で話してくれました。

「君には嫌なことを『嫌だ。』と言う権利がある。それが人権というもの。ただ、お母さんには君の命と健康を守る責任がある。だからこれは必要なことなんだよ。」

その言葉が今でも心に残っています。怖さは消えなかったけれど、「嫌だ。」という気持ちを受け止めてもらえたことで納得して腕を差し出すことができました。

家に帰って辞書で「人権」を調べると「誰もが平等に持つ権利」「自分らしく生きるための自由」と書かれていて、周りと違っても無理に我慢しなくていいのだと心が軽くなりました。

でも、学校では問題もあります。変わった子が「変なやつ。」と笑われて、嫌だと言っても「我慢しなさ

い。」と流されることがあるのです。僕も課外学習の時間にふざけるグループに「ちゃんとやろうよ。」と言いたかったのに上手く言葉にできず悔しい思いをしました。

最近、ニュースを見て、技能実習生のことを詳しく知りました。日本には四十万人以上の技能実習生がいて、神奈川県でも農業や工場で多くの外国人が働いています。

以前、父のつながりでインドネシアから来た技能実習生と話をする機会がありました。母はその人たちのことをいつも心配していて、差し入れをしたり話を聞いたり、少しでも日本での生活が良くなるように気にかけていました。

慣れない日本でお金を稼いでもその大部分を故郷への仕送りにしてしまい、あまり自由が無さそうに思えました。そのとき話してくれた「日本は好きだけど帰りたい。」という言葉に、深い寂しさを感じました。穏やかに話してくれるその裏に「嫌だ」という気持ちが隠れていることには気づきましたが、そのときは「偉いなぁ、大変だなぁ。」と思っただけでした。

でも改めて調べてみると、職場の環境によってはとてもつらい立場に置かれている人たちがいることを知りました。技能実習制度は技術を学ぶ目的のはずですが、低賃金や厳しい契約で縛られ、「嫌だ」と言えない状況が一部で生まれています。

とある記事では、過酷な残業を強いられけがをしても十分な治療を受けられない人の話がありました。技術を学ぶために日本に来たはずなのに、実際には労働力不足を補うために使われていて人権が軽視されるケースがあるのです。制度上の監視不足が、こうした人権侵害を放置している現実もあるそうです。故郷から離れた場所で「嫌だ。」と言えない事実があることを知り、僕の小さな「嫌だ。」とは比べものにならない苦しさを感

じました。

あのとき僕の「嫌だ。」に耳を傾けてくれたお医者さんのように、誰が彼らの声を聞いているのでしょうか。もし僕が近くにいたら、「無理しなくていいよ。」「つらいときは誰かに助けを求めていいんだよ。」と伝えたいです。

そのために僕は、小さな抵抗感を他人事と思わずに見逃さない人でありたいです。

たとえば学校の文化祭などで人権について考えるブースを作り、外国人労働者のインタビュー動画や手記を展示して、生徒が感想をノートに書くコーナーを設けたらどうかと考えました。

また、横浜市の国際交流ラウンジと連携して外国人労働者の話を聞く会を開き、中学生がインタビューを担当し、その内容を学校新聞に掲載することもできるのではないかと思います。まずは小さな声に気づく場をつくることが、僕にできる最初の一歩です。

人権は誰かが与えるものではなく、一人ひとりが尊重し合い、支え合って育てるものです。まだ中学生の僕には大きなことはできないかもしれませんが、そのことに気づく人が増えれば、誰もが自分らしく生きられる社会に近づくのではないでしょうか。これからも小さな「嫌だ。」を大切にして、誰もが自分らしく生きられる社会を築く一歩を踏みだしたいと思います。

小さな「嫌だ。」が、大きな希望につながると信じたいです。

だから僕は、小さな抵抗感を見逃さない人でありたいです。

最優秀賞（横浜ＦＣ賞）

ジョークと差別の境界

横浜市立もえぎ野中学校　三年
光田小春（みつだこはる）

グローバル化が進む昨今、同じ教室や職場に外国にルーツを持っている人がいるというのは、珍しいことではないだろう。だからこそ私は、彼らと共に過ごすにあたって、本当にお互いの文化を尊重しあえているのか、今一度確認するべきだと考えている。

私は何年か、ドイツのインターナショナルスクールに通っていたことがあった。そこは三十以上の国籍の生徒が在籍する、多種多様な文化が混在する場所であった。そのような環境に置かれた生徒たちは、ときに、文化や人種に関するジョークを言い合うことがある。

たとえば、新型コロナウイルスが流行しはじめたころのことだ。その発生源が中国・武漢だという話が世界中で広まっていた頃、アメリカやヨーロッパ出身のクラスメイトたちが、「コロナって中国のものだったよね」、「近づいたらうつるかも」と、冗談めかして話しはじめた。最初は軽い笑い話のようだったが、だんだんと「中国といえばコロナ」というイメージを、笑いのネタにしはじめたのである。もちろん、悪意からの言葉ではなかった。彼らにとってはあくまで「ジョーク」であり、その場にいた中国出身のクラスメイトも、明るく「そんなわけないだろ！」と笑いながら返していた。

しかし、私はその様子を見ながら、心のどこかでひっかかりを覚えていた。確かにそのときは、誰も怒っていなかった。雰囲気も明るく、ふざけ合っているだけに見えた。でも、もしそこにいた中国出身の友達が、冗談だと受け取れなかったら?あるいは、笑って受け流していたとしても、本当はどこかで傷ついていたとしたら?周りが笑っているからこそ、「気にしすぎ」だと言われそうで、本音を言えない人もいるのではないか。私はそんなふうに感じた。

国や文化についての話題を、ユーモアを交えて語り合うことは、とても面白く、学びになることもある。だがその一方で、無意識のうちに誰かの出自や文化を「からかいのネタ」にしてしまう危険性もある。人はそれぞれ、生まれ育った背景も、受け止め方も違う。

「このくらい冗談でしょ」という気持ちが、他者にとっては思いがけない「差別」や「侮辱」になるかもしれないのだ。

私はこの経験を通して、「どこまでがジョークで、どこからが差別なのか」という線引きは、非常にデリケートで、曖昧なものだと気づかされた。だからこそ私たちは、自分の言葉が誰にどう届くか、もう少しだけ慎重になる必要があると思う。特に今の時代、多様な背景をもつ人々と共に暮らすことが当たり前になってきた。そのため、「悪気がなければ何を言ってもいい」ではなく、「悪気がなくても傷つく人がいるかもしれない」という視点を持つことが大切なのだ。

日常生活のなかで、私たちは何気なく言葉を交わしている。ふざけて言ったひとことが、誰かの心を深く傷つけてしまうかもしれないことを、忘れてはならない。

差別は、特別な出来事として起きるわけではない。むしろ、日常のなかにこそ潜んでいる。だからこそ、私

たち一人ひとりが、身近な言葉や態度に注意を払うことが、差別のない社会への第一歩になるのだと思う。

最優秀賞（ニッパツ横浜FCシーガルズ賞）

笑顔のバトンをつないでいく

横浜市立南高等学校附属中学校　一年
塚本紗代（つかもとさよ）

私は小学生の頃に通級指導教室という教室に通っていました。通級とは、普段は在籍校で学校生活を送っている児童が週一回から月一回程度、先生と一対一で指導を受ける場のことです。自分にあったコミュニケーションの方法を一人ひとりの状態に応じて、学ぶことができます。具体的には、きこえの教室、ことばの教室、まなびの支援教室があります。私は、きこえとことばの障害のためコミュニケーションに課題のある児童が通う、きこえとことばの教室に通っていました。

私が小学一年生のころ、担任の先生から、「発音が気になる」と指摘され、専門の先生に相談することを勧められました。そして、二年生から通級に通い始めました。「イ」や「シ」、「チ」などのイ列の発音がうまく言えなかったので、先生が言い方のコツや舌の動かし方などを教えてくれました。通級での発音の練習だけではなく、家でも毎日の宿題としてくり返し発音したり、舌の筋トレを続けたりすることで、少しずつ正しい発音ができるようになりました。また、卒業後も引き続き自分で練習を続けられるように、発音した時の感覚を言葉にして、どうしたらもっと上手になれるかを先生と一緒に考えました。

通級は、ずっと座って発音練習というわけではありません。カードゲームや運動を先生と一緒にすることが

あります。このように、遊びながらコミュニケーションをとることで、実際の会話の中で、学んだ発音を使うことを経験させてくれました。そうすることで学校生活や社会に出てからも、自分らしく、安心して自分の個性を発揮していけるように指導してくださいました。

このように、二年生から六年生までの五年間で、様々な活動をしてきました。その中でも一番思い出に残っているのは、卒業時に行われたお別れ会です。お別れ会では、通級を卒業する児童とその保護者の前で、自分の得意なことを発表します。私は通級での思い出を作文に書き、フリップを得意な書道で作り、スピーチをしました。なぜ、スピーチを選んだのかというと、この五年間で話すことに自信がついたからです。もしも通級を知らなかったら、通っていなかったら、こんなにも人前で話すことに自信が持てなかったと思います。話すことが嫌いになったり、誤った発音が原因で言葉を正しく書くことができなかったりして勉強についていけなかったかもしれません。しかし、通級に通ったことで、自分のことを認めてくれる優しい先生に出会うことができました。そして、だめな自分を直すではなく、より良い自分になるために努力する大切さを学びました。

通級に通い、他のみんなとは違うことが恥ずかしいと思っていたこともありましたが、最後にはきちんと自分を認めることができました。きっと、先生や家族が私の気持ちを考えながら接してくれたからだと思います。

私はこのようなサポートをしてくれる環境があることを、より多くの子どもやその保護者に伝えていきたいです。どんなに小さなことでもいいから相談してみれば、変われる何かがきっと見つかると思います。

そして、私は自分の体験を伝えたり、相談することは恥ずかしいことではないと知ってほしいです。そうすることで、みんなが相談しやすい社会を作り、笑顔のバトンがずっとずっとつながっていくと信じています。

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

理解で越えられる壁

横浜市立汐見台中学校　三年
寺岡大輝

あなたは障害について理解があるだろうか。一目で分かることが多い身体障害や、パッと見て判断が難しい精神障害などがある。僕が二歳の誕生日を迎える頃、両親は僕が周りの子とは違うと感じていた。同い年の子と食事に行くことになった時、皆スプーンやフォークを使い器用に食べる中、僕だけがまったく進んでいなかった。母が心配し、一口だけでも食べさせようとしても頑なに拒み、一口も食べようとしない。僕は、食事以外でも皆と同じような行動をとることができなかった。母はそんな僕でも楽しめることを見つけるために、色々な習い事に通わせてくれた。だがどれも空回りし上手くいかなかった。母は毎日僕のことで悩み、時には泣いていることもあったと聞いた。皆ができることをできない僕に、大きな将来の不安を感じていたのだろう。そんな時に、母は療育センターの話を聞いた。まだ未就学の子達が、日常生活での困難を乗り越えていくための支援を行ってくれる施設だ。僕はそこで、知的障害・情緒障害を抱えていると診断された。分かりやすく言うと、学力や自分の感情の制御の成長に遅れが出てしまう発達障害だ。そしてぼくは幼稚園生になった。元気に走り回る子や集まって話をする子がいる中、僕は母の後ろに隠れるように留まっていた。母はこれから三年間、僕がこの環境でやっていけるか不安でいっぱいだったと思う。皆にできて僕にできないことが多くあ

り、そんな僕を馬鹿にしたり、「なんでこんなこともできないの。」と気持ちを口に出したりする子もいた。悲しいが普通のことだろう。自分にとってはできて当然と思っていることでつまづいている人がいると、なぜこんなこともできないのと苛立ってしまうことはだれにでもあるし、まだ幼い幼稚園生ならなおさらだ。自分のことで精一杯で、他人を理解することは難しいだろう。僕は上手く馴染むことができないまま小学生になった。小学校では個別支援級に入った。多くの人が通う一般級とは違い、少人数の教室でそれぞれのペースで学習を進める教室だ。だが僕も両親も一般級の皆との関わりを大切にしたいという思いがあったので、朝の会や、行く勇気が出た日は授業にも参加することになった。けれどどうしても僕ができないことが、一つあった。それは人前で声を出すことだ。毎日朝の健康観察で、自分の名前を呼ばれたら、「はい」と答えるのだが、それがどうしてもできない。自分の名前が近づいてくると、緊張で体が震え、声が出せなくなるのを感じる。それが毎日とても苦痛で、こんなものなくなればいいと考えていた。だが先生と、一言だけでも声を出せるように練習をした。先生も優しく何度も付き合ってくれた。そしてある日の朝の会で、僕の名前が呼ばれると、一瞬、沈黙が流れたが、勇気を振り絞り、とても小さな声だったが「はい」と言うことができた。黒板の方にいる先生まで僕の声は届いていなかったが、近くの席の子が僕が「はい」と言っていたと伝えてくれた。その瞬間、大きな拍手が上がった。小さな教室だが大きな会場での発表を終えたかのような気分だった。この体験が今の成長した自分に繋がるとても大きな出来事となった。もう一つは放課後デイサービスの存在だ。僕の様な発達障害を抱えた子の他にも、足が不自由で一人での歩行が困難な子や、耳が良すぎるため、常に大きな音から耳を守る保護具をつけた子もいた。僕も理解に時間がかかった。何でこんな物つけているのだろう、何で歩くだけで付き添いが必要なのだろう。けれど僕は先生を見て、とても驚かされた。デイサービスの先生

は皆、一人ひとりのできないことと正面から向き合い、乗り越えるための手助けを全力でしてくれたからだ。デイサービスでのいろいろな人との関わりから、僕はいつも「人との関わりを避けていた自分」から、僕の様な障害を抱えた人達の「できない」を克服し成長するための大切な条件があると思った。それはどちらも周りの人達の理解があることだ。小学校での「はい」と言えるまでの静かになった瞬間で、誰かが、「どうせ言えない。」と言っていたら、僕の勇気は出なかったと思う。放課後デイサービスで先生が、僕に寄り添って心を開く手伝いをしてくれなければ、今の明るい自分はいなかったと思う。どちらも相手のことを思い、理解しようとする気持ちが必要で、簡単にできることではない。だが誰もができる訳がないと決めつけてしまっていることでも、あなた一人の言動や行動でその人がぶつかっている障壁を乗り越えるための手助けになるかもしれない。僕が今、堂々と発表できるようになったのは、できない頃の僕を理解し見守ってくれた人がいたからだと思う。そして僕は皆に障害を抱えた人への理解を深めてほしいと思う。そうすればきっと、僕のように救われる人がいると思う。

最優秀賞（横浜キヤノンイーグルス賞）

弟の言葉

横浜市立新田中学校　三年
広松悠斗（ひろまつ ゆうと）

「お、おはよう…」

弟が言葉に詰まりながら、朝のあいさつをした。僕は、うなずきながら「おはよう」と返す。でも、学校ではこんなやり取りができないことも多い。

僕の弟には、吃音という障害がある。話し出すときに言葉がつっかえてしまったり、音を繰り返してしまったりすることがある。小さいころは、僕もそれが障害だとは知らなかった。たまに変な話し方になるくらいで、特に気にしていなかった。

「なんでうまく話せないんだろう。」

ある日、弟がぽつりとつぶやいた。僕は胸が苦しくなった。弟は毎日一生懸命話そうとしているのに、うまく話せないのを見ているともどかしい気持ちになる。吃音は、本人が努力してもすぐには治らない障害だということを、僕も少しずつ知っていった。障害という言葉に、最初は驚いたけれど、それは、「できないことがある」というだけで、「人として劣っている」という意味ではない。

小学校六年の時、人権学習で人権や差別のことについて考える時間があった。そのとき僕は、弟のことを思

い出し、勇気を出して吃音について友達に話した。弟のように話すことに困難がある人が、言葉がつっかえるたびに周りの目が気になることの不安や、自分が思うように話せないことに対するもどかしさ。自分が言いたいことを伝える前に、急かされてしまうような気がして、言葉が出にくくなる恐怖、そして周りの少しの理解がどれほど大切かを伝えた。友達は真剣に聞いてくれて「知らなかった。話し終わるまでちゃんと聞くことって大事だね。」と言ってくれた。その言葉を聞いて、とても嬉しかった。

弟は今も吃音がある。でも、自分のペースで話している。僕は、弟が安心して話せるように、最後まで話を聞くようにしている。それだけで、弟の表情が少し明るくなる気がする。人の話をちゃんと聞くというのは、相手を「認める」ことなのだと思う。弟の言葉が詰まっていたとしても、言いたいことには変わりない。話し方だけでその人を判断するのは、とても失礼なことだ。

人にはそれぞれ、得意なことも苦手なこともある。障害があるからといって、かわいそうだとか、特別な存在として見るのではなく「同じ社会に生きている一人の人」として見ることが大切だ。弟の吃音を通して、僕は人権とは「その人らしく生きることを守ること」だと知った。

弟の声を、もっと多くの人に聞いてほしい。話し終わるのを持ってくれるだけで、弟の言葉はちゃんと届く。僕はこれからも、弟の一番の味方でありたい。

最優秀賞（横浜ＤｅＮＡベイスターズ賞）

気付くことから始まる、一人ひとりの人権

横浜市立南瀬谷中学校　二年
重本（しげもと）　龍士（りゅうじ）

ある日、駅のホームの券売機の前で、外国から来たと見られる親子が切符の買い方に困った様子で立ち止まっている場面に出くわしました。母親は困った顔でスマートフォンを見つめ、子どもは不安そうに周囲を見回していました。通りすぎる人たちも誰も立ち止まりません。僕はその様子に気付きながらも、「声をかけてちゃんと伝えられるかな」「変に思われたらどうしよう」と迷っていました。でもそのとき、道徳の教科書に載っていた言葉を思い出しました。「人権とは、〝誰か〟のために一歩を踏み出す勇気のこと」と。

僕は思い切って、「キャンアイヘルプユー？」と声をかけ、身振り手振りも使って、駅の使い方を説明しました。うまく伝わったかは分かりませんが、親子は何度も、「ありがとう」「サンキュー」と笑顔でお礼を言ってくれました。その瞬間、僕は自分の小さな勇気が誰かの助けになったのだと感じました。

人権という言葉は、教科書の中の、遠く、難しい言葉だと思っていたけれど、実はとても身近で、日常の中にあるものだと気付きました。また、国籍や言語、見た目や文化などが違っていても、困っているときに、助けを求める気持ちや、尊重されたいという思いは、誰もが同じだと気付かされました。

今の社会には、国籍、性別、障がいの有無、経済的な事情など、様々な背景を持つ人たちが共に生きてい

て、日本には多くの外国から来た方も暮らしています。しかし、その中には、言葉の壁や偏見に悩み、自分の思いを伝えられずにいる人もいます。僕たちのちょっとした無関心や沈黙が、気付かぬうちに相手を傷つけたり、孤独にしてしまうこともあるのだと思います。

人権は「特別なこと」ではなく、「気付くこと」から始まります。目の前の誰かの不安な表情や小さな声に気付くこと。そして、それを見過ごさずに行動すること。それが、全ての人が安心して生きられる社会への第一歩になると僕は信じています。

最優秀賞（横浜F・マリノス賞）

かわいそうではない。

横浜市立中和田中学校　二年
山田歩夢（やまだあゆむ）

僕は昔からよく「かわいそうだね」と言われてました。

僕には持病の喘息とアトピー性皮膚炎があります。咳が止まらないと「かわいそうだね。」と言われ、湿疹がひどくガサガサな肌を見ると「かわいそうだね。」と言われることが多々ありました。心配で言ってくれているのだからと、僕はあまり気に留めなかったけれど心地のいい言葉ではなかったように思います。

あの時のもやもやしたあの気持ちはなんだったのだろう、と考えてしまいました。でも生まれつきのことだから、これは僕にとって当たり前で、なんでかわいそうと言われているのか、その時の僕は分かりませんでした。つるつるな肌に憧れていたけれど、僕は僕で幸せでした。

僕はアトピー性皮膚炎を軽減させるために漢方薬を毎日飲んで毎日薬を塗りました。咳を治すために針灸院へ通い、家でもお灸をしていました。食生活にも気をつけて食べたいものを我慢しました。日々のケアは正直面倒くさかったし、さぼりたかったです。しかし、人が人と関わるとき、外見で判断してしまう、なんとも言えない経験があり、僕は中学校へ入学するまでにアトピー性皮膚炎と咳を少しでも落ち着かせたかったのです。人を見た目で判断してはいけないと教えられているけれど、やはり現状それは難しいのかなという体験を

してきました。ガサガサな肌を見ると冷たい目で見られました。数年前コロナが流行ったこともあり、移らない咳だと説明しても咳をするのが心苦しかったです。それでもなかなか咳は止まりませんでした。そして自分の肩身が狭くなっていくのを感じたのです。本当はこういう不自由なことを不自由だと感じさせない世の中が人権を尊重するという一つのかたちだと思います。

例えば、生まれつき目の見えない方がいたとして、僕はその人にかわいそうと言おうとは思いません。足の不自由な方がいたとして、その人にかわいそうと言おうとは思いません。ハンディーキャップがあってもそれを受け入れられたときかわいそうではないと思います。

かわいそうという言葉は相手に対して、何かサポートできたり、その人のために手助けができたとき、やっと言葉にしてもいいかもしれないけれど、その人のために何も協力できないのであればかわいそうという言葉を安易に使ってしまうことは人権を尊重しているとは言えないのではないでしょうか。僕が願っているのは人を外見で判断せずに尊重し合ったり助け合ったり認め合ったりできる人間関係です。昔の僕に言ってあげたいのは人を見かけで判断しない人もいることと、助けてくれる人に出会えるよ、ということです。

そして、自分の外見などで自信をなくさなくていいよということです。僕は僕なりに人権の尊重とはどういうことなのかを学びました。学校の友達やこれから出会う人と関わるときは、外見ではなく、その人の内面や行動を大切にしていきたいです。今の僕はなかなか気づくことのできない小さな幸せを大きな幸せと捉えることができるし、当たり前のことは決して当たり前ではない。ということを深く理解しました。そして、僕の考える人権の尊重とは、人の痛みや努力に目を向けることだと思います。だれかにかわいそう…と言いそうになったときは一度考えてほしいです。きっとかわいそうではないと思うからです。

優秀賞

同じ人間で同じ地球に住んでいる

横浜市立横浜吉田中学校　一年
小尾（おび）　レイナ

「おはよう」「ニーハオ」「グットモーニング」学校に着くといろいろな言語であいさつをされる。私の小学校には、沢山の外国人がいた。外国人の中でも日本語が話せる人、少し話せる人、日本に来たばかりで全く話せない人がいる。みんな国関係なく仲良くしていた。けれど、日本語が全く話せない人達と仲良くしている子は少ない。「あの子〇〇人だから何言っても分からないか」「日本語通じないのイライラする」などの発言が聞こえてくることもあった。私も日本語が話せない子達に、日本に来たばかりだから話せないのは当然だと分っていても、そう思ってしまうことがあった。

私が五年生の時、一年間フィリピンの学校に行くことになった。タガログ語は少し聞き取れるくらいで、あとは何も分からない。どんな感じなのか気になる気持ちもあったが、フィリピンの人達と友達になれるか、学校に馴染めるのか不安だった。ごちゃごちゃした気持ちで学校に行った。思っていた通りだった。休み時間みんなは楽しそうに笑って話しているけど、私は輪の中に入れなかった。授業もみんなは手をあげて興味津々に受けているけど、私は何も分らなかった。話しかけてくれても何も答えられない。そんな私を見てみんなは不思議な顔をする。私は日本の学校にいた日本語が話せない子たちを思い出した。きっと大変な思いをしながら

学校に来ていたんだなと思った。その子達の気持ちが分かった気がした。行きたくないと思いながら、いつも通り学校に行って自分の席に座ると隣の子に「あなたはどこから来たの」と英語で聞かれたので「日本」と英語で答えた。すると驚いた顔をしてみんなに私が日本人だということを教えていた。その日からみんなは、私に授業を分かりやすく説明してくれたり、私が分からなそうな所あったらすぐにが教えてくれて、休み時間も一緒に私でも分かるカードゲームをして遊んでくれた。いつもみんなが私を理解して助けてくれるおかげで、少しずつタガログ語を書いたり話すことができるようになった。フィリピンの先生も「国や宗教が違うけれど、みんな同じ人間でみんな同じ地球に住んでいる」「いつも相手に対してリスペクトを持ってね」といつも私たちクラスメイトに言っていた。その言葉は中学生になった今でもずっと心に残っている。日本に帰ったら、日本語が話せない子達とも仲良くなりたいと思うようになった。日本の学校に戻ると新しく日本に来たばかりの子が多くいた。仲良くなりたくて話しかけると言葉があまり伝わらなくても笑顔でニコッとほほ笑んでくれた。そこから困ったことがあったら「ここ教えてほしい」と話しかけてくれた。一年後にはとても仲良くなれた。今でもよく話しかけてくれたり話しかけたりする。

国や宗教、肌の色などが違くても自分の偏見で傷つくような発言や行動をするのは間違いだ。私たちはみんなそれぞれ個性を持っている。「〇〇人だから」といって差別をしてはいけない。自分と違うからこそ学べることがあるかもしれない。みんな同じ人間で地球に住んでいるから、国や見た目関係なく、誰もが尊重されるべきだ。「寄り添おうとすること」「知ろうとすること」が大切だと感じた。私はこれからも自分にできることをしていきたいと思っている。

優秀賞

違いの受け入れ合い

横浜市立仲尾台中学校　一年
境（さかい）　澪（みお）

私が小学生だったときのこと。ある日、総合の学習の時間に、足が不自由で車椅子にのっている人が学校に来てくれました。その人は、生まれつきではなく、仕事で怪我をして、足が動かなくなってしまったそうです。今は車椅子を使いながら、自分の体験をいろいろな学校で話をしているとのことでした。

その日は、「体が不自由な人について、学ぶ」というテーマでしたが、話だけじゃなく、一緒に鬼ごっこで遊ぶ時間もありました。その時の私は正直、「鬼ごっこっていっても、足が不自由な人は無事にできるんだろうか？」と思っていました。線鬼とは、白線の上だけを使って鬼ごっこする遊びです。線の上だけで動くので、走るスピードよりも、どの線に逃げるか、どこで待ち伏せするかなど頭を使う場面が多い遊びです。先生は、

「誰でも参加できるようにルールを工夫してみましょう」

と言い、みんなでルールを少し変えることになりました。例えば、「走るのは禁止」「タッチするときは声をかける」などのルールを加えました。私は「ちょっとつまんなくなるんじゃないかな」と思っていましたが、いざ始まってみると、予想に反してとてもおもしろく、むしろ頭を使うぶん普段よりも白熱しました。足が不自

由な人も、私たちと同じように逃げたり、タイミングを見てタッチしたりしていました。私は「うまく逃げれるなぁ」と思ったのを覚えています。今思えば、走れなくても頭を使えば勝てると思いました。私はそれまで、「走るのが速い＝有利」としか思っていなかったけれど、それがすべてではないんだと思いました。遊び終わったあと、その人は

「今日は、すごくたのしかった」

と話してくれました。それを聞いて私は少し反省しました。自分が勝手に「足が不自由な人はうまく遊べない」と決めつけていたことと、「一緒に遊ぶのは難しい」と思い込んでしまったことに気づいたからです。

人権とは、すべての人が自分らしく生きるために持っている大切な権利です。体に障がいがある人も、そうでない人も、同じように大切にされるべき存在です。でも、誰かのことを「できない」などと決めつけてしまうと、その人の楽しみを奪ってしまうことにつながります。あの日、線鬼という遊びを通して私は「ちがいがあっても一緒にたのしめる」ということを体で感じました。大切なのは、全員が参加できるようにルールを工夫したり、理解し合おうとすることだと思います。ほんの少しの工夫や思いやりがあるだけで、遊びや、学校生活も、社会も、ずっと生きやすく楽しくなるはずです。だからこそ、私はこれからも、「ちがいを受け入れ、共に楽しむこと」を忘れずにいたいと思います。

優秀賞

一人を見つめて

横浜市立早渕中学校　二年
髙平真帆（たかひらまほ）

近年日本には海外からの観光客や移住者が増えてきた。私の町にはインターナショナルスクールがあるし、スーパーのレジ打ちの方も外国の方だったりする。町を歩いてそんな人々を見かけるたびに考える。数年前の私について。

私は海外で数年間幼少期を過ごした。エジプトの学校に通い、たくさんの友達をつくった。学校は幼稚園から大学まであった。たくさんの国の人が通っている学校だったが、私が知る限りアジア系の人は五、六人程度だったと思う。そもそもエジプト自体にアジア人が少ないのかもしれないが、私達はなかなかの少数派だった。そんな私の学校では、年にたくさんのイベントがあり、その中の一つに「自分にルーツがある国の服装を着て登校する」というのがあった。私はその日、浴衣を着て学校に向かった。多くの生徒はエジプトの伝統的な衣装であるガラベーヤを着ていたが、その他にも様々な衣装を見ることができた。先生や生徒はお互いの衣装を褒め合い、お互いの文化を受け入れていた。私の浴衣もかわいいと言ってもらえて、すごく嬉しかった。私がその日感じたのは、「国境を越えて互いを認め合う事の素敵さ」そして「自分とは違う所も受け入れる事ができる優しさ」だ。

冒頭でも言った通り、近年日本には様々な国から来た人が暮らしている。他の国の人と話す時、私が最近考えるようになった事は、自分が偏見や先入観にとらわれてはいないかという事だ。当時のエジプトで日本人、アジア系の人々がどう思われていたかなど、私は知るよしがない。私は英語の発音だってイマイチだっただろうし、アラビア語もすこししか話せなかった。みんなはそれでもあの日浴衣がかわいいと言ってくれたし、いつも仲良くしてくれた。それは、国がどうのとかではなくて、「私」を私として見てくれていたからではないかと思う。

だから私は、目の前にいる人をその人個人として見れるようになりたい。人の人生を一から十まで全て知る事はできない。だからこそ噂や無意識のうちに存在する偏見や先入観を無くして、「目の前にいる一個人」として向き合いたい。遠い国の友人達が、かつて私にそうしてくれたように。

優秀賞

「正しい疑い」

横浜市立荏田南中学校　三年
土肥篤史（どひあつし）

空高くそびえ立っているたくさんのビル、きれいな街並み、素敵な学校、そしてなにより、人の温かさがそこにはあった。中国は怖い、そんな気持ちを持って海を渡ったのは今から三年前のことだっただろうか。中国に行く前、僕はテレビやインターネットなど中国での大きい事故や犯罪、中国人の迷惑動画などをよく見ることがあった。

そして僕は日本人学校に通い始め、サッカーチームにも入り、中国での生活に慣れていった。そして徐々に中国人と触れ合う機会も増えていった。

ある日、僕は中国のチームと練習試合をすることになった。その時にボールは僕のものを使うことになった。そして試合が終わり、帰りの支度をしているときにボールがないことに気がついた。ピッチ上を探したが見つからず、自分のコーチにも相談したが、「相手のチームが奪っていったかもね。もう見つからないだろう」と言われた。僕のチームメイトも同じようなことを言った。自分も内心そう思っていた。後日、自分のチームメイトを通じて相手のチームに連絡を取ることができた。そして僕はボールを持っていないかを聞いてみた。すると相手のチームの人たちが持っているかを確認するだけでなく、ピッチの中や場外まで広く探して

くれたのだ。そして場外で僕のボールを見つけ、届けてくれた。僕はこのことがとても嬉しかったし、また、驚きもした。そして少し申し訳なくも思った。なぜなら相手のチームが奪っていったと自分の偏見によって、中国だからという理由で勝手に決めつけて、信用できず、勝手に悪と決めつけていたのだ。

また、ある日タクシーに乗った。するとタクシー運転手さんが自分たちに向かって大声で怒鳴ってきた。最初はなにか怒られたのかと思ったが、翻訳アプリを通して話を聞いてみると、「中国に来て何年だい？」や「僕も日本に行ったことあるよ」、「大阪は知ってる？」など、全く怒っている内容ではなく、むしろ友好的な会話で驚いた。この出来事から中国人の大きい声や怒っているように感じてしまった話し方は、怒っているのではなく、自分の意見をはっきり伝える文化なのだと気づいた。彼らを理解するうちに、それまで抱いていた怖いイメージは消え、声の大きさも全く気にならなくなった。それどころか、自分の意見をしっかり伝えられるところにリスペクトを覚え、「自分ももっと自分の意見をしっかり伝えられるようにならなければ」と思うようになった。

他にも中国で過ごした二年間の中で自分の考え方や認識を改めるさまざまな経験をすることができた。

そのようなことから僕は日々、インターネットで見ることや当たり前に思っていることに疑いを持つことにした。すると日常の様々なところでいろいろな誤解があることに気がついた。この国は治安が悪いと聞いたことがあるから住んでいる人も怖い人、この人は暴言を吐いたって聞いたから悪い人、インターネットで見たから、親が言っていたから、そういったことで善悪を区別してしまうことはその区別されたものの差別につながってしまう。さらにその善悪は次の人、また次の人といつの間にか広がっていき、取り返しのつかないことになってしまうだろう。そうなってしまうとその人がいじめられたり、国をまたぐ争いにも発展しかねない。

それを防ぐためにインターネットで見たこと、人から聞いたことを鵜飲みにするのではなく、自分で考え、疑ってみることが大切だと思う。もちろん不確かなことはすべてが間違っているとはいわないが、僕は正しい情報であるかを見極めてほしいのだ。そうすることによって間違った情報を流すこともなく、流れてきた間違った情報を食い止めることができる。それがいつかみんなができるようになる日が来れば悲しい差別がなくなり、よりよい社会になると僕は思う。

優秀賞

誰かのための勇気

横浜市立岡野中学校　一年
永井　優里奈（ながい　ゆりな）

焼そばやかき氷を食べ、ラムネを飲みながら、盆踊りを踊る。多くの人が集まるこの行事は、「お祭り」である。私はこの行事から懸命に英語の勉強をするようになった。

私の町内では、近くの大きな公園を使い、毎年お祭りを行っている。お祭りの準備も多くの人が参加し、大人から子供まで多くの世代で助け合い、準備をする。そのため、町内の人達はみんな仲が良いのである。そこに昨年アメリカからJさんが引っ越してきた。町内の人達は話しかけようとしたが、言葉が通じないため、話すことができなかった。当日もJさんは一人でみんなのことを眺めていた。とても寂しそうだった。しかし、そこへ一人でベンチに座っているJさんのところに同じ町内のTさんが話しかけたのである。Tさんはこの町内に欠かせない人である。準備の日も当日もTさんが盛り上げている。責任感が強く頼れる存在で、とても面白い人だ。Tさんは英語を話すことができない。しかし、Jさんと言葉が通じているように見えた。Jさんは笑顔になっていた。そのあとは、Tさんが盆踊りにJさんを誘い、町内の人達全員で踊りを教えた。Jさんはしあわせだと言っていた。みんな笑顔で一生懸命Jさんと話した。夏祭り二日目、Jさんは「浴衣」を着ていた。その浴衣はTさんが貸してくれたという。周りの人が似合っているというと、Jさんは照れながらうれし

そうにしていた。二日目も全員で沢山楽しんだ。

この出来事から私は言葉が通じない場合でも、誰かが、仲間外れなくみんなで楽しむという気持ちを持つ。そして行動に移す事で、笑顔で一緒に楽しむことができるという事がよく分かった。日本中には言葉が通じずに困っている人は数え切れないほどいる。そのため、国で対策を行っている。外国人専用の相談所をつくったり、英語表記の看板を作ったり、多くの対策が行われている。しかし、その対策ですべての人を救えている訳ではない。だから、私は日常の英語の授業を真剣に受けるようにしている。習い事でも英語を習い、誰かのためになれるように、と勉強している。この先、より外国人のためになる取り組みが生まれていくと思う。しかし、ひとりひとりが英語を話せるようにする事が取り組みとしてとても良い影響につながると思う。そして、そのような取り組みをする前提に誰かのためになることをするという勇気を持つことが一番大切だと思う。Tさんのように英語が話せない人でも誰かのためになるように行動するという勇気があることで笑顔にさせることができる。それはとても怖く、大きな勇気が必要だ。しかし、その志が多くの人を救う。この話は外国人差別だけに関する事ではない。日常的に心がけるべきである事である。私はそのような誰かのためにと考え、行動に移せる人になりたい。そして、将来外国人を助けられる役職につき、この作文をもとに多くの人に誰かのためになることをする勇気の大切さを伝えたい。

優秀賞

「好きな色を選ぶことができる社会へ」

横浜市立豊田中学校　三年
中尾　明日香

「ピンク色のランドセルが好き」私はこの声にハッとした。先日、ユーチューブでたまたま流れてきた、ランドセルを作っているセイバン公式の「ランドセル選び」の動画。この動画は、子供たちにランドセルを選んでもらい、その様子を保護者にモニタリングしてもらうという内容である。最初に親が好きそうなランドセルを子供が予想し、後から自分が好きなのを選んでもらうような流れだ。私はその動画の中でも特に印象深かったのは、ピンク色のランドセルを選んだ男の子だ。最初は親が好きそうだと予想した黒色を選んだがのちに自分が選ぶときピンク色にしていた。何気なく見ていたのに、私はその姿にハッとした。なぜなら、「男の子なら、青色や黒色シルバー色などかっこいい色を選ぶだろう」という自分の先入観があったことに気がついたからだ。ジェンダーについてはネットや社会の学習などで日々意識はしているが、「黒色は男、赤色は女。」という性別だけで色を決めつけていて、ジェンダーはまだまだ自分が気づいていないことや学ぶことが多いんだなと、考えさせられた。このように、男性と女性それぞれに対しての固定的な思いこみを、「ジェンダーステレオタイプ」と言う。最初に述べた色の例えの他にも、日常会話で使われることのある表現が挙げられる。例えば、「女の子なんだから」「男の子なんだから」というこのフレーズである。私もＳＮＳで、「男なのにメイク

している」という偏見を見たことがある。このＳＮＳのステレオタイプの恐ろしいところは、ただの偏見だとしてもそれがふつうとして広まって、誰かを傷つけてるとは気づかないまま、それが「正しい」と刷り込まれるところだ。では、このような偏見をなくしていくにはどうするべきか。まずは、最初に述べたような、「自分の中にある思いこみ」や「先入観」に気づくことが大切である。私もランドセルの動画でピンク色を選ぶ男の子を見たとき、自分にも性別によって色を決めつける感覚があったと気づかされた。また、ＳＮＳで日々目にする「男らしさ。女らしさ」という表現を当たり前に受け入れるのではなく、「本当にそれでいいのか」と思うことも重要である。ジェンダーじゃなくても言えることだが、自分と違う選択や考え方を笑ったり否定せずに受け入れようとすることが、偏見を無くす第一歩になるかもしれない。

優秀賞

おばあちゃんの心をみつめて

横浜市立大道中学校　三年
米山真未（よねやまま み）

見えないふりをしていた、聞こえないふりをしていた。でも私は自分の心の狭さに気づいた。そして無念さと後悔が胸の奥で絡み合うのを感じた。その気づきのきっかけをくれたのは、おばあちゃんの言葉だった。

私には、認知症のおばあちゃんがいます。正直、前までは「もう何も分からない人」だと思っていました。でも、おばあちゃんは私の態度も声のトーンも、全て分かっていました。私は勝手な思い込みでおばあちゃんの心に向き合わず、距離を置き、冷たく接してしまっていました。

ある朝、学校に向かう途中でおばあちゃんが散歩しているのを見かけました。だけど私は声をかけずに通りすぎました。「どうせ気づいていないだろう」と思ったからです。でもその日夕方になってまた会ったとき、おばあちゃんは私に声をかけて笑いながら、私に言いました。「まみちゃん最近朝見るけど、全然話しかけてくれないわね。」

その瞬間、私ははっとしました。何も見えていないと思っていたけど私のことをちゃんと見てくれていたのです。申し訳なさと悲しさが一気に押し寄せて、涙がこぼれそうになりました。その時、私は初めて自分の小さな心の弱さと向き合わなければならないと感じました。私の思いこみで、おばあちゃんの優しさを見逃して

いたことに、胸がぎゅっと締め付けられました。

思い返せば、同じことを何度も聞かれるたびに苛立ち、強く答えてしまったこともありました。それでもおばあちゃんは笑顔で受け取めてくれました。怒りや悲しみを受け取めながら、私のことを思いやってくれていました。そして、悲しい気持ちも、申し訳なさも笑顔でごまかしていたのだと気づきました。今思えば、あの笑顔の中には、私への深い愛情と温かさがあったのだと思います。

しばらく会えなかったある日、久しぶりにおばあちゃんに会うと、笑いながら「あなた誰だっけ?」と言われました。胸がぎゅっと痛く、悲しさでいっぱいになりました。でもその気持ちは見せられず私は笑ってごまかしました。悲しい気持ちを笑顔で覆い隠しました。でも次の週にはおばあちゃんはまた明るく私の名前を呼んでくれました。「まみちゃん」と。

記憶は揺れても、心は私を覚えてくれている、忘れてしまうことがあっても、思いは消えないんだと、胸の奥が熱くなりました。あの瞬間、私はおばあちゃんの心の強さと優しさを、今まで以上に深く感じることができました。私はやっと気づきました。認知症だからといって「分からない人」じゃない。忘れてしまうことはあっても悲しさや寂しさ、優しさ、愛情は消えない。おばあちゃんは毎日笑顔で、私を思いながら過ごしていました。私はその心に向き合わず、勝手に決めつけていた。胸が張り裂けそうに後悔しました。

学校で人権とは「一人ひとりが自分らしく生きる権利」と学びましたが、そのときには正直あまり実感はありませんでした。でもおばあちゃんとの日々で、その意味が初めて胸に届くようになりました。病気や障害でできないことがあっても、心は失われない。その人の思いや気持ちに向き合うことこそ、本当の人権だと知りました。

私はこれから、おばあちゃんが安心して笑顔で過ごせるように接していきたいです。何度同じことを聞かれても、笑顔で答えたい。冷たい言葉ではなく、優しい言葉を届けたい。そして、誰かの心を大切にできる人間でありたい。おばあちゃんに言われた「全然話しかけてくれないわね」という一言そして「あなた誰だっけ」と言われても、次の週には笑顔で「まみちゃん」と呼んでくれたこと。どちらも私にとって一生忘れられない出来事です。認知症であっても人の心も人権も失われてはいけません。それをおばあちゃんが教えてくれました。私はその心を大切にして、誰かの心に寄りそえる人でありたいと思います。

これからも、おばあちゃんの笑顔を見逃さず、そっと手を握りながら、一緒に笑い続けたいです。

優秀賞

車いすのおばあちゃんと見た景色

横浜市立矢向中学校　三年
渡部桜咲

中学一年の頃、私のおばあちゃんが脳卒中で倒れました。すごく怖かったのを覚えています。けれど、命は助かって今も元気にみんなと話しているし、私の学校の話を楽しそうに聞いてくれています。ですが、後遺症で左半身が動かなくなってしまい、車いすで生活するようになりました。

最初は、「大変そう」と思っていたけれど、一緒に出かけるようになってから「大変そう」どころではないなと思うようになりました。スロープがないところだと入れなかったり、エレベーターが遠くて、たった一階上がるのに何分もかかったり、「ここ通れないね」と言い、その場所に行くことをあきらめてしまうことが何度もありました。前は全然気にせず通っていた道や建物が車いすの人にとっては通れない場所に変わってしまい、とても不便だなと思いました。それに、一緒に町を歩いていると、周りから視線を感じることも多く、やはり車いすは目立つのだなと思いました。また、嫌な顔をされ、何度かイラッとすることがありました。私のおばあちゃんは、いつも気にしないでいいよと笑ってくれたけど、私はなぜこんなに冷たい人が多いのかなと思ってしまいました。けれどある日、飲食店に行った時、お店の人が車いすがありますと言わなくてもいすをどかしてくれて、ゆっくりでも大丈夫ですよと声をかけてくれ、理解してくれている人もいることに気づき、

安心することができました。

車いすを使うようになったけど、おばあちゃんは何も変わっていないです。普通に話すし、笑うし、文句も言うし、家族の中でも一番しっかりしているくらい頼もしいです。でも周りの目や町の環境などは、まるで一人で何もできない可哀想な人のような扱いをしていて、悔しいなと少し思いました。

社会でバリアフリーを習った時は、スロープがあることやトイレを広くするということだけでなく、心の中のバリアを無くすことがほんとうのフリーではないのかなと感じました。車いすを使っていても、少し助けが必要なときがあるだけの同じように生きていて、笑っている人です。おばあちゃんと一緒に出かけるたびに私は、そう感じたことを思い出しました。今はまだバリアだらけのところも多いけれど、私は少しずつでもそのことに気づいて、障がい者や困っている人がいるとき、手を貸せる人になりたいなと思いました。

おばあちゃんは、「私は車いすでよかったよ。今まで見てこなかった世界が見れたからね。」と言いました。私もそれを聞いて、そのとおりだなと思いました。これからも、おばあちゃんと一緒に、見えてなかった景色を見ていきたいです。

優秀賞

祖父から受け継いだ強さ

匿名

私は色弱です。色弱とは、色の見え方が他の人と少し違う人のことです。科学的には、「色覚異常」と呼ばれるそうですが、私はこの言葉が好きではありません。見え方が違うだけなのに「異常」という言葉を使われるとまるで自分が劣っているようで悲しくなるからです。

亡くなった祖父も色弱でした。だからこそ私は祖父と自分を重ねて考えることがあります。祖父も、私と同じように「他の人と違う見え方」で悩んだことがあったのだろうと思いました。でも、祖父はいつも笑顔で明るく堂々としていて自信にあふれていて、とてもかっこよかったのです。

どうして祖父はそんなふうにいられたのか私はずっと気になっていました。あるとき思い切って祖父に聞いてみたら、「大人になったらわかるよ。Yくんなら大丈夫。」とだけ言って、優しく笑ってくれました。意味がよくわからなかったので、母にも聞いてみました。すると、祖父の子ども時代を話してくれました。

祖父が子どもの頃は、今のように「色弱」と言わず、「色盲」と呼ばれていたそうです。しかも、学校ではみんなの前で検査が行われ通知表にも「色盲」と書かれてしまったといいます。そこで自分の見え方が他の人と違うと知らされ、同時にまわりに知られてしまったのです。進学や職業選択のときにも差別があったと聞き

ました。

祖父もそうした差別を経験し、「色盲って何、どうして自分だけが違うの」とつらくなり、祖父は母親に気持ちを打ち明けたそうです。すると母親は「ごめんね、ごめんね」と泣いて謝ったといいます。その姿を見て、祖父は大好きな母を泣かせてしまったことが、とても悲しく、二度とこの話を誰にもしたくないと思ったそうです。それ以来、祖父は色を気にせず自分を信じて生きていこうと決めたと思います。

この話を聞いて、私は「だから祖父は強くて優しい人だったんだ」と思いました。そして母は私に「あなたは、祖父の遺伝子を受け継いでいるのだから、強さも明るさも持っているんだよ」と言ってくれました。その言葉に、私は自分の色弱という特徴も、少し誇らしく思えるようになりました。

「大人になったらわかるよ。Yくんなら大丈夫。」という祖父の言葉には、「他人の目を気にするより、自分を信じれば大丈夫。」という応援だったのだと思います。

これから私は、祖父のように自分の個性を大切にし、周りの人にも思いやりを持って接し、どんなことにも前向きに挑戦していけるような、強くて、優しい人になりたいです。そして、色弱を知らない人には自分から伝えたり、1人1人の個性を、理解し合える社会になるよう、できることを考えて行動していきたいです。

参加校紹介（121校）

■横浜市立

〔鶴見区〕
潮田中学校
上の宮中学校
寛政中学校
末吉中学校
鶴見中学校
寺尾中学校
生麦中学校
矢向中学校

〔神奈川区〕
浦島丘中学校
栗田谷中学校
菅田中学校
錦台中学校
松本中学校

〔西区〕
老松中学校
岡野中学校
軽井沢中学校

〔中区〕
仲尾台中学校
横浜吉田中学校
共進中学校
永田中学校
蒔田中学校
南中学校

〔港南区〕
港南中学校
六ツ川中学校
笹下中学校
芹が谷中学校
東永谷中学校
日限山中学校
南高等学校附属中学校

〔保土ケ谷区〕
新井中学校
岩井原中学校
岩崎中学校
上菅田中学校
西谷中学校
保土ケ谷中学校
宮田中学校

〔旭区〕
旭中学校
今宿中学校
上白根北中学校
希望が丘中学校
左近山中学校
都岡中学校
鶴ケ峯中学校
本宿中学校
万騎が原中学校
南希望が丘中学校
若葉台中学校
汐見台中学校
根岸中学校
浜中学校
森中学校

〔磯子区〕

〔金沢区〕
洋光台第二中学校
釜利谷中学校
大道中学校
富岡中学校
富岡東中学校
並木中学校
西柴中学校
六浦中学校
義務教育学校 西金沢学園
大綱中学校

〔港北区〕

篠原中学校
城郷中学校
高田中学校
樽町中学校
新田中学校
新羽中学校
日吉台中学校
日吉台西中学校

〔緑区〕

鴨居中学校
田奈中学校
十日市場中学校
中山中学校
東鴨居中学校
義務教育学校 霧が丘学園

〔青葉区〕

青葉台中学校
あかね台中学校
あざみ野中学校
市ケ尾中学校
美しが丘中学校
鴨志田中学校
すすき野中学校
奈良中学校
みたけ台中学校
緑が丘中学校
もえぎ野中学校
山内中学校
谷本中学校

〔都筑区〕

荏田南中学校
川和中学校
茅ケ崎中学校
都田中学校
中川中学校
中川西中学校
早渕中学校
東山田中学校

〔戸塚区〕

秋葉中学校
汲沢中学校
境木中学校
大正中学校
戸塚中学校
豊田中学校
名瀬中学校
深谷中学校
舞岡中学校
桂台中学校

〔栄区〕

上郷中学校
西本郷中学校
本郷中学校

〔泉区〕

泉が丘中学校
いずみ野中学校
岡津中学校
上飯田中学校
中和田中学校
義務教育学校 緑園学園

〔瀬谷区〕

東野中学校
下瀬谷中学校
瀬谷中学校
原中学校
南瀬谷中学校

■その他

横濱中華學院中学部

ご協力ありがとうございました。

●応募状況

年　度	令　　和				
	３年度	４年度	５年度	６年度	７年度
応募校数	127	131	129	124	121
作 品 数	55,079	53,434	55,470	55,323	53,459

※本作文集に掲載している作文は、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

●第44回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会

〈第一次審査員〉

横浜市立中学校教育研究会国語科部会　23名

〈第二次審査員〉

横浜市教育委員会事務局指導主事　12名

〈最終審査員〉

横浜市人権擁護委員会　会長	髙橋　潤
横浜市人権擁護委員会第一ブロック委員	長島由佳
横浜市人権擁護委員会第二ブロック委員	島田　学
横浜市人権擁護委員会第三ブロック委員	落合純一
児童文学作家	吉富多美
横浜市ＰＴＡ連絡協議会　会長	松本雅威
横浜市立中学校人権教育推進協議会　会長	竹山昭子
教育委員会事務局人権健康教育担当部長	横山康孝
市民局人権担当理事	君和田　健

●協賛

横浜FC
ニッパツ横浜FCシーガルズ
横浜ビー・コルセアーズ
横浜キヤノンイーグルス
横浜DeNAベイスターズ
横浜Ｆ・マリノス

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市内における人権啓発活動を、関係機関の協力のもとに総合的かつ効果的に推進するために平成12年９月に設立。

構成：横浜市・横浜人権擁護委員協議会・
横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

第44回全国中学生人権作文コンテスト

横浜市大会作文集

令和７年12月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会
TEL 045(671)2718(横浜市市民局人権課)
横浜市教育委員会事務局
人権健康教育課　TEL 045(671)3249